

「東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）2023」を開催しました！

人間科学研究科教授 村本邦子

「東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）2023」を9月1日（金）から5日（火）の4泊5日で開催した。今年は院生4人、総勢8人で、おおまかなスケジュールは下記のとおりである。

	場所	内容
9月1日（金）午後	宮城県亘理郡山元町	山元町フィールドワーク 震災遺構中浜小学校 やまもと民話の会のみなさんとの交流会
夜	宮城県多賀城市	多賀城プロジェクト実行委員会のメンバーとの交流会
9月2日（土）午前	宮城県仙台市	みやぎ民話の会のみなさんとの交流会
午後	宮城県多賀城市	多賀城市フィールドワーク
9月3日（日）	福島県白河市	「東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）2023in白河」の実施
9月4日（月）	福島県沿岸部	福島県檜葉町伝言館訪問（安斎育郎先生との懇談） 沿岸部フィールドワーク
9月5日（火）	福島県沿岸部	古滝屋原子力災害考証館Fスタディ・ツアーに参加

今年も多くの方々のお世話になった。白河でのプロジェクトを共催くださったNPO法人しらかわ市民活動支援会、協力頂いた一般社団法人未来の準備室、NPO法人ビーンズふくしまのみなさま、そして多賀城実行委員会、やまもと民話の会、みやぎ民話の会のみなさま、宝鏡寺にある伝言館では安斎育郎先生と丹治杉江さん、古滝屋にある考証館では里見さんとFツアーのガイドさんにも感謝申し上げる。

それぞれの詳細については、院生たちが報告してくれているので、ごく一部ではあるが、印象に残ったことを記しておきたい。

震災から13年目を迎え、長くおつきあいしてきた方々が一人、また一人と鬼籍に入られていく。今年は山元町を訪れ、民話の会の方々と交流したが、ずっとお世話になっていた庄司アイさんはもういらっやらない。アイさんは家ごと津波に流された体験を持つが、アイさんの娘、萱場裕子さんは、「母は、この仕事を残すために助けられた命だったのではないかと思う」とおっしゃっていた。町民の体験を集め、『巨大津波』を発行するにいたるプロセスを話してもらったが、アイさんは話を聴くごとに何日も寝込んでいたという。本当に命をすり減らして、よくぞこのような貴重な記録を残してくださったと胸が痛み、感謝の念が堪えない。

みやぎ民話の会のみなさんからは、今年発行された飯舘村の菅野テツ子さんの語りからなる『語ってくんちええ 聞かせてくんちええ』の制作こぼれ話を聞かせてもらった。テツ子さんの語りは、2014 年、丸森で開催された「みやぎ民話の学校」で聞いたことがある。飯舘村には何度も足を運んできたし、ある程度、イメージを持っているが、今回、『語ってくんちええ 聞かせてくんちええ』をあらためて読む中で、村の細部が生き生きとより立体的に見えてきた。そのテツ子さんも、この冊子の完成を待たず亡くなられたと言う。

お話をお聴きしながら、「聴かせて頂く」ということに対する民話の会のみなさんたちの真摯な姿勢には居住まいを正す思いだった。院生たちとともに私自身も、あらためて学び直さなければならない。



檜葉町宝鏡寺の早川篤雄和尚もいなくなりました。ここ数年は、毎年、宝鏡寺にある伝言館を訪ね、早川和尚と安齋育郎先生にお話を伺ってきた。昨年9月、早川和尚があまりに痩せておられて心配になったが、頭脳明晰、声も大きく張りがあり、相変わらず愛と情熱にあふれておられた。今回、早川和尚に関する展示がたくさん加えられており、「人死を憎

まば生を愛すべし。存命の喜び日々楽しまざらんや」の手書きの文字に和尚のお顔が浮かび、涙が出た。



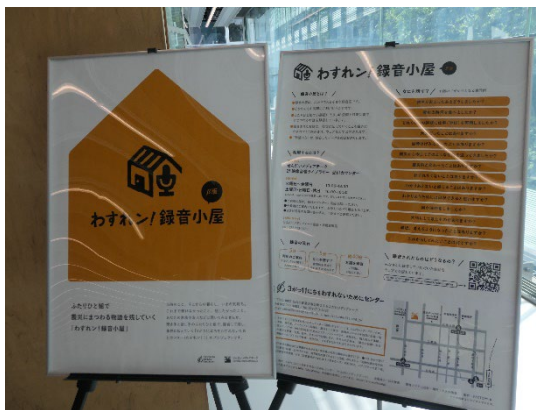
その他にも逝ってしまった方々がたくさん思い浮かぶ。そして、13年というのはこういうことなのだなあと今更ながらに思う。考えてみれば、自分たちも齢を重ねてきたのだ。今年のプロジェクトは、「いのちのバトン」がキーワードだったが、先輩方からバトンを受け取り、次世代に渡すことで命は繋がっていくのである。

飯舘村の長正サツキさんによる狐に化かされたご自身の体験語りは面白かった。思い出してみれば、私の田舎にも河童や人を化かす狸がいたものだった。河童の鳴き声を真似て教えてくれた父（そして私たち子どもは、たしかにその声を聞いたことがある）も一昨年に逝ってしまった。私の中にもバトンがある。

長正さんによれば、テツ子さんのお母さんである菅野キクさんは村一番の語り手で、若い頃、時々、ご自宅を訪ねてお話を聴いたが、娘のテツ子さんもじっと一緒にいて、何も言わずに聴いていた。キクさんが亡くなって初めてテツ子さんが民話を語り始めると、そっくりそのままキクさんの十八番の話がでてきたそう。まったく同じ話を、白河の「震災の記憶を聞き書きする」でも聞いた。浪江町から避難して来た大堀相馬焼いかりや商店13代目の窯元山田慎一さんは、子どもの頃から父が馬の絵を描く姿をずっと見ていたが、自分で描いたことはなかった。父が亡くなり、人に頼まれて初めて描いてみたら、驚くほどうまく描けたのだそう。伝承、継承というのは、意図せずとも、繰り返し接するなかで身体に乗り移るものなのだろうか。私自身の心理臨床のなかで経験することでもあるが、これが、魂とか幽霊とか言われているものなのかもしれない。



民話の会の活動から影響を受けた若手アーティストたちは、濱口竜介監督はじめ、瀬尾夏美さんや小森はるかさんなど素晴らしい活動を展開されている。メディアテークには、「311 わすれないセンター」の展示に録音小屋や記入シートなど「コミュニティ・アーカイブ」を残す仕掛けが工夫されており、数々の小さな声に触れることができた。伝言館には新たに丹治杉江さんというパワフルな事務局長が加わり、古滝屋の原子力災害考証館 F スタディ・ツアーにも新しいガイドさんがいらっしゃった。白河の高校生たちは、浪江町から避難してきた方たちのお話を聴き、伝承する活動をしていた。おおぞら保育園では、東日本大震災を知らない子どもたちがすでに数多く巣立っている。バトンは渡される。悲観することはないのかもしれない。



人々の身体を潜り抜けた伝承は生き物のようで、パワフルだが、同時に脆くもあり、だからこそ、慰霊碑や記念碑、ミュージアム、アート作品のように有形のものがバックアップしてくれる。

原発事故関係のミュージアムはすべて訪れていると思うが、今年 7 月に開館した南相馬の「おれたちの伝承館」を訪ねた。あらためてアートの力を感じる。さまざまな形で受け渡されるものがある。福島物語は、もっともっと多様に立ち上がるべきなのだ。



プロジェクト終了後、事務局の平田さんと一緒に、シンポジウムで流すビデオレターを撮るために、気仙沼や大船渡に立ち寄り、宮古と遠野を訪れた。2011年、2012年の頃を思い出す場面が多く、胸にじんときくるものがあった。山田町の「鯨と海の科学館」にも立ち寄り、度重なる災厄とそれを乗り越える人々の力を確認した。懐かしい人々と再会するとお互い嬉しくてたまらなくなる。災害は怖いけど、こんな素敵なるものをそっと置いていってくれる。あらゆることに感謝したくなり、生きる勇気と自信が湧いてくる。まるで奇跡のようなものだ。そんなことを多くの人々に伝えていけたらと思う。



2023 プロジェクト+

國士郎

今年の福島訪問では、私の中にいくつかのことが未整理のまま居座った。

日程は「汚染水・処理水」の海洋放出について議論が騒がしい9月初旬だった。中国の批判と水産物の輸入停止措置などの対応は厳しいもので、IAEAの総会において政府間の論争になった。だがこの原稿を書いている10月1日、世間のニューズワードとしては、もう下火だ。第二回目の放水スケジュールが東電から発表されたりもしている。

そして大型連休を迎えた中国国民の海外旅行先の第一位に日本が復活していると報道があった。政府の見解と市民の反応にギャップがあるのは何事によらずだろう。

国内では電力危機をまわっており、一部原発再稼働やむなしにまで持ち込んだ。そして重なる電力料金の値上げに市民の悲鳴も聞こえる中、全国各地の料金差が話題になり、関西電力（原発2基再稼働中）が一番安いことが明らかになったが、そこに関西人はほとんど反応しなかった。

このように論点のずれまくる社会を構成していて大丈夫かと疑念を持つが、実はこういうやり口のなし崩し承認が、市民社会のずるい生き残り戦略なのかもしれないとも思う。

私は誰の主張も真に受けたくないところがある非科学的人間なので、合理科学に騙されないぞと思っていたりする。素人が正しい見解を持ちたいなどと欲望するから、事実吟味や合理性に引きずられたりするのだ。

原発事故とその後処理の影響は既に出ているし、今後もあるに決まっている。そう遠くない未来に、新たに明らかになる事もあるのだろうが、そのとき社会は、あの段階では分からなかったなどと口を揃えて語るのだろう。過去にそういうことはたくさんあったから、この問題もきっとそういうことになるに違いない。

まだ分からないことがたくさんあることを承知している社会が一方で、今わかっていることで出来事を理解したが、説明を求める。専門家と呼ばれる人たちは、それに応えるしかないのだろう。

早川和尚の亡くなった伝言館で安斎育郎さんが「トリチウムを含んだALPS処理水そのものは、それほど人体に悪影響はない」とIAEAの見解と同様のことを話し、それよりも心理・社会的影響が大きいと語ったことに驚いた。東大で原子力工学を学び、体制の中で大きな不利益を被りながら反原発の立場できた人の言葉だ。おそらく科学的にはそうなのだろうなあと思った。

昔「不都合な真実」という地球温暖化に関するドキュメンタリーがあった。内容はあまり覚えていないが、このタイトルはインパクトがあった。私たちはみんな、自分の立場にとって「都合のいい真実」を集めて語っていないかと振り返らされた。

マンガトークの題材には展示作品でもある「双子」を選んだ。双子を競わせるような子育て、世間に勝手にわが子の優劣を語らせるような事を、親はしてはならないと思うと描いた。くわえて、名門中学校にお受験で入れた息子の万引き問題で、退学処分になった母親の激しい怒りと絶望の実話も話した。

これと原発事故被災地から避難を余儀なくされ、先祖代々の蓄積を奪われた陶芸家が体験を語る言葉が重なった。氏が避難した場で仕事を求めた時、何の資格も技能もない中年男性として扱われ、草むしりのような仕事しか紹介されなかった。被災者個々の人生に対する敬意など想像できない支援窓口担当者が行う勝手な評価を容認すべきではないし、誰だろうとそんなことを自分の人生にさせてはならない。

今は新しい場所で再起している陶芸家が、それでも語った「東電に合法的に仕返ししてやりたい！」の怒りは、言葉の熱が立ち上るようだった。たくさんの喪失や無念な放棄が重なった末の言葉なのだろうと思って聞いていた。

東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）2023 フィールドノート

立命館大学文学部教授 鶴野 祐介

はじめに

今年度のプロジェクトは4泊5日だったが、私自身は体調面の不安があったため、前半の2泊3日の白河までとなった。

◇9月1日（金）午後

宮城県山元町 震災遺構中浜小学校見学

「やまもと民話の会」の皆さんの話を聞く（山元町防災拠点・坂元地域交流センター）。

丸山隆さん・黒川恵子さんとの懇親会に参加（多賀城市内の中華料理店）。

◇9月2日（土）

午前：「みやぎ民話の会」の島津信子さん・山田裕子さん・長正サツキさんの話を聞く（仙台市民会館）。

午後：「みやぎ民話の会」の例会に参加（同会場）

◇9月3日（日）福島県白河市 白河市立図書館「りぶらん」にて

「東日本家族応援プロジェクト+（プラス）2023 in 白河」に参加

午前：「団土郎の漫画トーク」

午後：ワークショップ「あそびとおはなしのひろば」

浪江町出身者への「震災の記憶を聞き書きする」企画（オブザーバー）

その中から、ここでは3つのトピックスに絞って書き留めておきたい。

1. 「やまもと民話の会」寺嶋重子さんの語り2題

常磐線のJR坂元駅にある「ふるさとおもだか館（山元町防災拠点・坂元地域交流センター）」の一室で、「やまもと民話の会」の6名の皆さんから、今回の集まりを設営して下さった「みやぎ民話の会」の島津信子さんと、立命館大学から訪れた8名（教員3名、大学院生4名、事務局1名）でお話を伺った。

はじめに、寺嶋重子さんが2話、山元町の伝説「下田沼の大蛇」と、笑い話「宝下駄」を語って下さった。前者のあらすじは以下の通り。――山元町坂元に、下田沼という沼があり、それを見下ろせる「御狩屋崎（おかりやぎき）」という丘の上に立派なお寺があった。この寺には、器量もいいしお経を唱えるのも上手、人柄もいい、笛の達人の若い和尚が住んでいた。ある月の夜、笛の調べに引き寄せられたのか、美しい姫が現われた。それから月の美しい夜にはいつも姫が通ってきて、楽しい時を過ごすようになる。やがて二人は深い仲になり、

赤ん坊が生まれたが、大蛇の姿だった。実は、姫は下田沼の主（ぬし）の大蛇だった。間もなく、子を抱いたまま姫は下田沼に身を隠し、残された若和尚は何も手につかず毎日ぼんやり過ごしていた。ある夜、突然大蛇が現れて和尚を殺してしまった。その場所には和尚さんのお墓が祀られ、「和尚壇（おしょうだん）」と呼ばれるようになった。そのうち、寺は無くなってしまったという（＊この話は『山元町誌』に掲載されており、地名はこれに準拠）。

聞き終わった時、「何故、和尚さんは殺されなければならなかったのか」という、その理不尽な結末に、モヤモヤした気持ちが尾を引いた。どうしてこんな話が語り継がれてきたのだろうか？　さまざまな解釈ができるだろうが、思いつくままに少しだけ記しておく。

客観的な事実として言えるのは、それまで栄えていたお寺が突然に没落し、廃寺となったということだった。その理由として選ばれたのが、蛇との婚姻であり、蛇による祟りを受けたという物語だったと考えられる。つまり、仏教伝来以前より受け継がれてきた蛇崇拜と、仏教の信仰との、対立と相克が背景にあるのではないかということである。青年僧・安珍を大蛇に化身して情念の炎で焼き殺す娘・清姫の物語「安珍清姫（娘道成寺）」が想起される。

ただし、別の解釈も可能である。若和尚は殺されたのではなく、妻帯をご法度とされる宗門において妻子を持ってしまったために、二人と一緒に逃亡したのではないか。あるいはまた、異形の子を成した母親が世をはかなんで、わが子と共に入水し、夫の和尚も後追い自殺したのかもしれない。つまり、当地における「スキャンダル」と呼ばれる事件が、そんなに遠くない昔に起こったことの痕跡とも考えられる。

さらには、人望も厚く地元の人からも愛されていた和尚が突然亡くなり、廃寺となるという結末を持つこの話には、理不尽で不条理な出来事は、決して他人事ではなく、次は我が身に降りかかることも起こり得るという、戒めの意味があるとも受け取れる。正直で真面目で周りの人から愛される主人公が幸せになり、嘘つきで欲深い敵対者が不幸になるのが、「民話」の中の重要なジャンルである「昔話」の定番だが、愛されるべき主人公が不幸になって終わる理不尽な物語が、「民話」のもう一つのジャンルである「伝説」の定番だと言える。そう考えると、後ほどご紹介する、やまもと民話の会編集『一語りつぐー 小さな町を呑みこんだ 巨大津波』（以下『巨大津波』）に収められた数々の証言録もまた、「民話」の種なのだと思います。

「民話が生まれる状況が、この本（＝『巨大津波』）に詰まっています」と評したという、同書の小学館版刊行を後押しした東京学芸大学名誉教授の石井正己さんのコメントが想起される。つまり、「下田沼の大蛇」の話は、証言録『巨大津波』へとつながっている。どちらも、理不尽で不条理な現実世界を直視し、受けとめながら、それでも前を向いて生きていこうと努めた山元町の人びとの、「生きざま」や「死にざま」を刻んだ「民話」に他ならないと言えるだろう。

後者の「宝下駄」のあらすじは次の通り。――貧しい家の母子がいた。ある時、母親が病気になる、息子は薬を買うお金がないので、金持ちのオンちゃん（＝おじさん）の所へ行ってお金を借りて薬を飲ませたが、一向に治らない。薬がなくなったのもう一度オンちゃんの所へ行って無心するが、「図々しい」と言って、金を貸してもらえない。

どうしたらいいかわからず、八幡様の境内で思案していたまま眠ってしまった息子の夢枕に、白い髭のお爺さんが現れて、こうお告げがある。「一本歯の下駄をやる。これを履いて、転んだら小判がチャリンと出てくる。でも、転ぶ度に少しずつ背が低くなるから、転びすぎないように気を付けろ」。目が覚めたら、その通りに一本歯の下駄があったので、早速これを履いて転んだら小判が出てくる。

息子がオンちゃんの所で小判を持っていき、事情を話したところ、オンちゃんは、借金を帳消しにしてやるからその下駄を貸してくれという。息子が帰っていったのを見届けたオンちゃんは、この下駄を履いて、転んでは起き、転んでは起きして、小判を出し続けた。

翌日、下駄を返してもらおうと、息子がオンちゃんのところへ行ってみると、庭先に小判が山積みになっていたが、オンちゃんの姿は見当たらない。そうして、自分の足元で、もぞもぞと動くものがあつたのでよく見たらオンちゃんだった。小判は息子のものになり、母親と一緒に幸せに暮らしたということだ。

こちらは後味スツキリの「昔話」である。前者の、理不尽でモヤモヤ感を聴く者の心に残す「伝説」とは対照的で、語り手の寺嶋さんのバランス感覚に脱帽する。



2. 『巨大津波』編集のウラ話

寺嶋さんのむかし語りの聞いた後、『巨大津波』の作成・編集のウラ話を、「やまもと民話の会」の前代表の故・庄司アイさんの娘さんである萱場裕子さんを中心に、聞かせていただいた。本書は、宮城県亘理郡山元町のやまもと民話の会が発行した冊子『小さな町を呑みこんだ 巨大津波』第一集（2011年8月1日発行）、第二集（同年12月1日発行）、第三集（2012年4月1日発行）を元に合冊したもので、2013年3月9日に小学館から出版された。

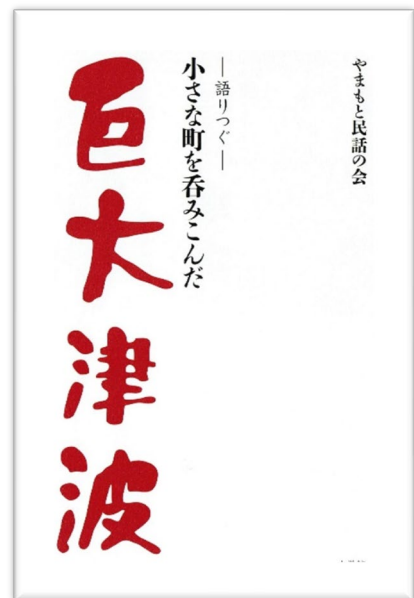
冒頭近く、庄司アイさんが「はじめに」の中で、こう綴っている。「『語りつごう』をあいことばに民話をやってきたこと、……この震災を語りつがなければ、の使命と責任を感じました。テープレコーダーもない、パソコンもない、向かう机もない今だからこそ、真実を伝えられるのでは…と。自然にはさからえないんです。はむかってはならないんです。自然と睦みあって、これからもこの命を大事に生きよう」（pp.20-21、表記を一部変更）。そしてまた、アイさんはご自身の証言録「民話は残った」の末尾近くに、次のように記す。「再起への力

は、民話からももらいました。民話はやさしい。民話は熱い。民話は強い」（pp.42-43）。

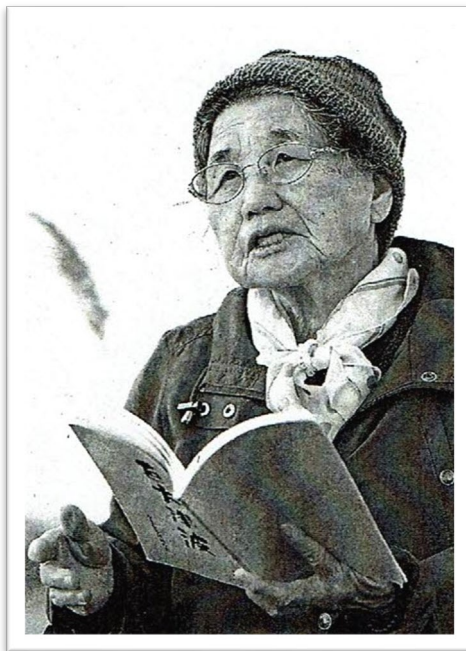
震災から約2か月後、証言録を作ることを決めた「やまもと民話の会」の会員6名は、アイさんを中心に、手分けをして、身近にいた人のところへ訪れて、話を聞くことを始めた。テープレコーダーなどの録音機材は使わず、新聞の折込広告の裏紙などに鉛筆で簡単なメモを残しておき、それから自分の家（避難所や仮設住宅など）に帰ると、その日聞いてきた話を文章化していった。次に、紙の隅々までびっしりと書き記された文章を、アイさんの娘の裕子さんがワープロに打ち込んでいった。もともと綺麗な字を書くアイさんだが、そこに綴られた文字は娘にも読みづらいほどのものだった。そして、アイさんは当時76歳だったのだが、1回その聞き書きの作業をするとすっかり疲れてしまい、3日間ぐらい寝込んでしまったという。

アイさんたち聞き手自身も被災体験をしていたからこそ、語り手も熱心に語り、聞き手も共感して耳を傾け、また自身の体験も語って返したに違いない。だからこそ、あのような立派な証言録ができたのだらうと思える。と同時に、この仕事をやり遂げるために、震災後の10年間、母を生かしてくれたのかもしれない――。裕子さんはそう語られた。

裕子さんが本書の作成に大きな役割を果たしておられたことは、私も今回初めて知ったことだった。「あんなにフラフラになっても聞き書きを続けた母は、（民話が）相当好きだったんだね」と振り返った裕子さんの笑顔がとても印象的だった。（*拙著『うたとかたり



の人間学 いのちのバトン』（青土社）に収めたエッセイ「庄司アイさんと『民話の力』」（pp.179-187）を参照されたい）。



（故・庄司アイさん 京都新聞夕刊 2021/03/04 掲載）

3. 「みやぎ民話の会」の島津さん・山田さん・長正さんへのインタビュー

9月2日午前中の会では、今年5月に刊行された長正サツキ・島津信子・山田裕子共編『飯館村菅野テツ子のむかし語り 語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』（私家版）の、出版までの経緯、語り手の菅野テツ子さんの人となり、飯館村の現状などについて、3名の方から語っていただいた。また、本書に収載されている短い昔話「婿の杵枕（きねまくら）」を長正さんが朗読した後、長正さんご自身の体験談「狐に化かされた話」も聞かせていただいた。

本書出版までの経緯については、「あとがき」にも3人が書いておられるが、今回のインタビューを通して一番強く感じたことは、3人が一緒に力を合わせたからこそ、本書が出来上がったということだった。それぞれが果たした役割について紹介しておきたい。

はじめに、長正さんについて。彼女は飯館村にお住まいであり、20年以上前からテツ子さんや彼女の母キクさんのお宅を何度もお邪魔して、キクさんのむかし語りを何度も聴いていた。また、キクさんが亡くなられた後には弔問にも足を運んで、テツ子さんと言葉を交わしていた。原発事故の後に避難生活を余儀なくされ、2013年に当時松川町の仮設住宅にいたテツ子さんの許に、長正さんは島津さんや山田さんたちと一緒に訪ねていき、むかし語りを聞かせてほしいと頼んだ。その時、テツ子さんはそれまで家族以外にはほとんど語っていなかったが、母親の真似事だといって、キクさんの十八番（おはこ）の話を語ってみせた

という。テツ子さんがそうして語った理由には、その場に、長正さんがいたことが大きかったに違いない。

また、テツ子さんのむかし語りの背景にある、生育歴や暮らしぶり、そして原発事故後の避難生活についても語っていただくことになったが、同じ飯舘村で生まれ育ち、避難生活も体験された長正さんが聴き手だったからこそ、同じ当事者として、腹を割った話がテツ子さんもできたのだと思われる。そして何より、飯舘の土地言葉で語られたテツ子さんの話を生き生きとした文章に再現するに際して、地元の人間である長正さんが欠かせない存在だった。



次に、島津さんは、テツ子さんとの出会いの翌年の2014年8月に開催された丸森町での「第8回みやぎ民話の学校」の実行委員会の中心メンバーだった。ご自身の出身地でもあり、福島県に隣接しており原発事故による放射能汚染の風評被害を受けていた丸森町の現状に心を痛めていた島津さんは、他のメンバーと相談の上、今回「福島部屋」と題する分科会を設けた。そして、そこに福島からの語り手を招いて、全国から集まるたくさんの参加者の前で、むかし語りだけでなく、事故後の避難生活をはじめとする「生活譚」についても語ってもらうことを決めた。その中のお一人としてお願いしたのが、前年に語りを聞いていたテツ子さんだった。実は、この場には私も立ち会っていたのだが、100名を超える観客たちに大爆笑と深い感銘を与えたことで、テツ子さんは語る楽しさや喜びを実感し、そこから「生きる力」を得たのではないかとと思われる。

その後も、「福島部屋」と一緒に担当した島津さん、長正さん、山田さんの三人は、何年間にもわたって何度もテツ子さんの住む仮設住宅や避難先、飯舘村の宿泊施設などに足を運んだ。そうして、彼女からたくさん話を聞き取り、本書『～～ 語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』をまとめ上げた。ちなみに、この題名を発案し、表紙カバーのイラストを描いたのは島津さんだという。



山田裕子さんは、島津さんと同じく、1975 年の「みやぎ民話の会」の発足当初のメンバーであり、長年にわたって代表として同会を牽引してこられ、現在は顧問である小野和子さんの補佐役を務めてきた。民話を聴くことの意味や、それを本に編集して刊行することの意味についての、小野さんの考え方、いわゆる「小野イズム」について、彼女の背中をずっと追いながら深く学んでこられた山田さんは、本書にもこの「小野イズム」が貫かれたものになりたいと心血を注いだ。

「小野イズム」とは何か。私の解釈を手短に述べる。語り手が語った昔話や伝説などの「民話」（＝むかし語り）を、切り取ってピンで止めて標本をつくるように記録に残すことは、「民話」を聴くことの意味ではないし、これを編集して本を刊行する意味もない。その話の背景にある、語り手の生い立ちや暮らしぶり、生きざまや死にざまが、その行間から読み取れるようなものでなければならない。その時はじめて、語り手の「いのちの息吹（アニマ）」が文字に起こした「むかし語り」に注ぎ込まれて、「聴く」ということが完了する。

最初に作ったテツ子さんの聞き書きの小冊子について、「みやぎ民話の会」の合評会で、小野さんをはじめ、厳しい批評を受けた山田さんたちは、この本を2部構成にして、昔話や伝説や世間話などの「むかし語り」を収めた「第一章 語ってくんちえ 昔話 村のふしぎな話・おもしろい話」の後に、テツ子さんの生い立ちやこれまでの暮らしぶり、特に原発事故の後の避難生活について聞き取った「第二章 聞かせてくんちえ テツ子さんのこと」を配置した。そうしたこと、第一章の「むかし語り」にも、テツ子さんの「アニマ」が注ぎ込まれた。

決してこれが完成形だとは思いません、足りない部分など気づいたことがあったらぜひ指摘して下さい、と山田さんは謙虚に締めくくった。



それから、3・11から12年半が経とうとしている現在の飯舘村の状況について、長正さんに尋ねてみた。すると、避難先から飯舘に帰還して、大規模な農業経営を始めている人も、若い人たちに何人かいるけれど、帰ることなく、避難先で最期まで過ごすことを決めているというのが、特に高齢者の場合、圧倒的に多いとのことだった。一番の理由は、飯舘に移ると、現在利用している病院やクリニックから遠くなり、通うのが難しくなるということだ。また、テツ子さんも話しておられたように、高齢者だけが帰還して子どもたちと離れて暮らすと、もしも緊急事態が起きた場合、子どもたちに迷惑をかけることになる。わがままは言えない、帰りたいのはやまやまだけど仕方ないと、多くの方が考えているようだ。長正さんはしんみりとそう話された。

最後に、長正さんご自身の経験談として、狐に化かされた話を語っていただいた。

——小学4、5年生の頃のこと、遠足の弁当に入れる稲荷寿司を作ってもらうために、夕方、油揚げを買いに、自転車で10分ぐらいかけてお店に行った。その道中は、狐がよく出ると言われている、こんもりとした山の中を抜けていく砂利道だった。

店に着き、買い物を済ませて、前のカゴに入れて家へ帰る途中、急に自転車のペダルが重くなり、タイヤが動かなくなった。それで仕方なく自転車を押してギギギッと引きずりながら行った。下り頃になった時、母親が向うから迎えに来てくれて、「サッコ（＝サツキ）かぁー」と呼んだ。そこで、「かあちゃん」と返事をしたその途端、タイヤがクルクルッと動き出した。あれはきっと、狐に化かされたに違いない。もしあの時、母が呼んでくれなかったら、油揚げは狐に取られていただろう——。小学4年生の少女に戻った長正さんは、「あれは絶対、狐だったの」と上気した口調で結んだ。

私の昔話学の師匠・稲田浩二先生は、最初の単著を『昔話は生きている』と題した。長正さんの語りを聞いた時、「民話は生きている！」と私の脳裏に浮かんだ。



おわりに

山元町でも、飯舘村でも、そこに暮らす人びとが、日常生活の中で容易に「民話」を語ったり聴いたりしていたのは、遠い過去の話になっている。「ふるさとの民話」を次の世代に語り継ぐことの大切さを分かっているけれども、それを具体的に実行に移すことは本当に難しいと、今回のインタビューの中で何度も話題に上った。それは、3・11の被災地だけの話ではなく、全国各地で共通している課題でもある。

おそらく、これに対する万能薬はない。けれど今回、現地を訪れた院生たちにとって、寺嶋さんや長正さんの「むかし語り」を聞いた時、ビックリしたりニッコリしたり、モヤモヤしたりスッキリしたりする中で、「民話は生きている」と実感したであろうことは、かけがえのない経験だったに違いない。これを契機として、次は他の場所に暮らす人びとや、何より家族や知り合いの人たちから、それぞれが紡ぐ「小さな物語」としての「民話」を、「語ってくんちえ 聞かせてくんちえ」とせがんでいってくれることが期待される。

それが、私たちのプロジェクトが掲げる「証人になること」と重なり合う営みであると確認されたのが、今回の私自身にとっての収穫だった。来年もまた、こうして院生たちと一緒に現地を訪ねて、「語ってくんちえ 聞かせてくんちえ」とせがませていただこう。

「つながり、聞き、受け取り、伝えること」と「見て、感じること」

人間科学研究科 実践人間科学領域 M1 武田 明恵

私は、本学外実習で、つながり、聞き、受け取り、伝えることはどういうことなのかを、先人の先生方から直接見せていただき、その中に入れていただく経験をしました。また、被災の影響が目に見える地域にフィールドワークに行き、見て感じる経験をしました。

次にこのプロジェクトに参加する方々、同じ場所に行く方々や、次の世代の誰かの道しるべになりますよう、宮城県、福島県に伺う中で、私が経験したこと、理解したことや感じたことをレポートとして記載いたします。

1 「つながり、聞き、受け取り、伝えること」を捉える

宮城県では、民話の会の皆様、多賀城実行委員会の皆様と出会いました。それぞれの方が自身の被災経験を語り継ごうとしておられる。民話の会の方々は被災した方々の語りを聞き、民話という語り継ぎの形を使って伝えておられる。その姿を、このプロジェクトが応援している。そこに自分がいるということがありがたく感じられました。

被災の経験は人それぞれにあります。おかしな話かもしれませんが私は「被災当時、関東にいた私は『被災者』というカテゴリーに入れてもらえるのだろうか」等と考えておりました。私の不安を察してか、多賀城実行委員会の方々は「水に浸かった人と、揺れの身を経験した人でも、被災経験は違う。自分は浸かっていないんだ。」と言葉をかけてくださいました。実習初日の私に、その言葉がどんなにありがたかったか。多賀城実行委員会の皆様からは、人とつながる可能性を広げる対話の姿勢を教えていただいた気がします。

東日本大震災に関する大切な情報が伝承されていくことの必要性はさることながら、そのこと以外にも、伝承されないこと、風化していくことがあります。民話の会の方は、親族の戦争の体験を聞いておけばよかった、とおっしゃいました。私たち自身、自分の家族の物語をどれほど理解しているのでしょうか。

私は縁あって、この実習で、自分の家族の物語とも向き合う、かけがえのない体験をさせていただきました。たまたまこの実習の行程の中に、父方母方の祖父母の出生地がすべて含まれておりましたので、並行して訪問させていただいた場所がいくつかあります。母や父が語らない家族の物語に触れることができ、実習外で出会った方々も、突然の私の訪問を支えてくださいました。

村本先生がおっしゃるように「まずは動いてみること」で、平田さんのおっしゃるとおり「実際に行って、目で見て感じること」からすべてが始まります。つながり、聞き、受け取り、伝える、という経験の乏しい私たちの世代には、まず自分の身近な伝承と向き合うことが、このプロジェクトを理解するのに役立ちます。その世代が、このプ

プロジェクトに入れていただくことで、伝承ということはこういうことなのだ、ということを理解することができる、と感じました。

写真1 多賀城実行委員会の方々とおおぞら保育園トレーラーハウス内で対話する

丸山隆さんから受け取った、被災体験に基づく冊子（丸山さん作成）を手元に。



写真2 民話の会の方々と戸花慈母観世音（山元町）で祈る

100年後の日本に、私たちが残さなければいけないことが、残っていくように。



2 「つながり、聞き、受け取り、伝える」伝承の場に参加する

震災の記憶を聞き書きする（EMANON プロデュース）という取り組みでは、高校生が浪江町から避難して生活することを強いられている方々からお話を聞く機会がありました。実習に参加した大学院生は、その中でサポーターの役割をしました。この時、事前に鑑賞した THE DAYS、東日本・家族応援プロジェクトの中に登場したフォトボイスプロジェクトのこと、浪江町のこと等の情報が、私を支えました。微に入り細に入り、ご助言を下された先生方に深く感謝申し上げます。

私のグループでお話ししてくださったのは、浪江町で焼き物を作っておられ、白河で新たに焼き物を作る仕事を再建された方でした。私たちは語り手の方から、様々な感情

のこもった語りを受け取りました。例えばその方は、高校1年生の時に原発建設の公聴会で「東京で使う電力をここ、で作ってロスはないんですか。単純になぜ千葉や東京に作らないんですか」と質問し「送電線の技術が発達しているからロスはありません」と回答を受けた時に感じた違和感や不安が現実になったこと、地震の後の渋滞状況を見て即座に避難をしたこと、家業を継いだのに公共施設の草刈り臨時職員をしたこと、生まれて初めて面接を受けたこと、いつか合法的に東電をぎゃふんと言わせたいこと等をお話ししてくださいました。中でも、高校生が「後世に伝えたいことは」と聞いたとき、「当時高校生だったとき生まれた不安、考え方から自主避難をすることができたのだ」ということを伝えておられたのが印象的でした。

質問をする主体は高校生でしたが、私もこの聞き書きの取り組みの中でいくつかの発話をしました。語られる方が語りやすい場に、高校生が質問しやすいようにと考えながらその場にいました（私が語りを要約してしまうことが語り手に取って失礼にならないだろうか、高校生の質問を取ってしまうことにならないか等）。下記の場面では、自分の受け止めに語り手に伝えることの範囲について、少し不安がありました。帰宅後に振り返って考えると、この取り組みは、心理学でいうところの非構造化面接に似ていました。私は受け止めに自己開示しようと言語化したけれど不十分で、それを語り手の方が受け取って下さり、より具体的な言葉として返して下さった場面なのではないかと、理解を深めました。語り手の方の懐の深さに、感謝申し上げます。

思い返した対話の場面

（武田）高校生でも疑問に思うことが、人生を通じて、こう、在る。なんというか、高校生の時の〇〇さんからメッセージを受け取ったような気持ちになりました。

（〇〇）あんまり、安全神話じゃなく何でもかんでも、自由に流されて、信用するなって。

写真3 Emanon にて白河で実施したプロジェクトを振り返る

10年前に二本松のプロジェクトに参加された方との再会を喜びながら



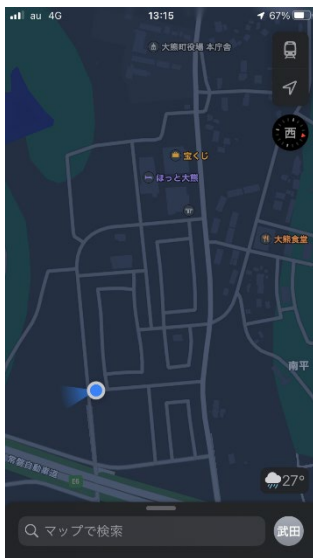
3 「見て、感じる」フィールドワーク

フィールドワークでは、福島第一原発がある大熊町に行ったり、双葉駅周辺を回ったり、今なおがれきや線量等、被災の影響が目に見える地域に行きました。印象的だったのはどうにも綺麗すぎる部分と、いまだ手つかずの部分が隣接していることです。この状況は他の地域の人に届いていない、ニュースで報道されない内容であると感じました

いくら本で読んでも、行かないとわからないことがあることは、絶対的です。きちんと理解するには実際に伺うことが重要だと、改めて学びました。実情を見て、感じてこそ、自分の意見を持つことができると考えます。この見て、感じたことが、伝承の背景をさらに支え、より鮮明な個人の視野となっていくことを実感いたしました。

なお、私たちが実習に行く頃は、ALPS 処理水の中国の反応に関する報道が多くありました。科学的安全性を前面に出した報道ですが、伝言館の安齋先生は、たとえ科学的安全性があったとしても、心理、社会的な側面を考えねばならないと強調されておりました。

写真 4 大熊町 一部、人が住む町がある



大川原第2 災害公営住宅（Googlemap から）



作業員の方の住居は
壁の色が違うとのこと

学校



学食のような食堂



写真5 大熊町 上記のエリアのすぐそばにある帰宅困難区域



いまだ手つかずの民家



写真6 双葉町

駅前の綺麗な市役所



双葉駅から徒歩8分 光善寺



写真7 古滝屋での最後の夜：リフレクション

大学院生としての学びを深められる機会として、村本先生、団先生、平田さん、継続してプロジェクトに参加されている河野さんに世界を捉える視野をいただきながら



4 最後に

4-1 していただいてばかり

村本先生は、本プロジェクトを「大したことはできない」こと前提に開始されたとおっしゃいます。参加した学生としてはむしろ「していただいてばかり」と感じました。

多賀城実行委員会代表丸山さんは、ご自身の経験に基づき作成された、被災に関する書類を、民話の会の方々は巨大津波という冊子をくださいました。黒川さんはご実家のぶどうを、民話の会の方々や白河市民活動支援会の小磯さんは地の物を使ったお料理を作ってくださいました。言葉どおり、体全体でその場所を感じた実習です。そして、こんなにたくさんの場所に行き、感じる事ができたのは、10年以上プロジェクトが継続し、その中で出会った方々との関係性の中で、こちらに記載しきれぬほどたくさんの支えをいただいたからです。関わってくださった全ての方に、感謝を申し上げます。

4-2 本プロジェクトは人間科学研究科の実習である

実習が終わった今思うのは、心理学は社会にある仕事に紐づいて存在するのではないということです。何か予定をしていたわけではありませんが、多賀城で黒川さんとはポストトラウマティックプレイの話をし、白河での聞き書きの取り組みに面接技法の知識が活かされました。心理学というと、実験やカウンセリングルームが想定されることが多いですが、心理学はそのような小さなところに収まっていない。これが、人間科学研究科の存在背景であり、これを学ぶ場所が必要であることも本実習が継続している理由ではないかと感じました。私たちは東日本の実情を見て、感じるのみならず、東日本・家族応援プロジェクトから、心理支援という概念を超え、日本に合った形で心と向き合う伝承の形を学びました。「つながり、聞き、受け取り、伝えること」と「見て、感じること」。このいずれの側面にも心理学が広く存在しています。私は立命館大学人間科学研究科で、忘れてはならない被災を体で学ぶ経験、心理学の学びの経験の両方を兼ね備えた本実習に参加することができたことを誇りに思います。一生忘れません。災害時には丸山さんの作ってくださいました冊子を参考に命を守ります。本当に、ありがとうございました。

※私にも「大したことはできない」ことに変わりはありませんが、最後に、このプロジェクトについて伝承するために必須のリンクを掲載させていただき、ご報告を終了させていただきます。

【よくわかる東日本・家族応援プロジェクト】

RADIANT

[「東日本・家族応援プロジェクト」の10年を振り返る | 続けていく災害復興支援 |](#)

[RADIANT - 立命館大学研究活動報 | 研究・産学官連携 | 立命館大学 \(ritsumeai.ac.jp\)](#)

[「東日本・家族応援プロジェクト」番外編レポート 続けていく震災復興支援 | 災害と生きる | RADIANT - 立命館大学研究活動報 | 研究・産学官連携 | 立命館大学 \(ritsumeai.ac.jp\)](#)

応用研時代

[立命館大学 応用人間学研究科 | 震災復興支援プロジェクト \(ritsumeai.ac.jp\)](#)

人間研以降

[人間科学研究科 震災復興支援プロジェクト | NEWS & EVENTS | 人間科学研究科 | 立命館大学 \(ritsumeai.ac.jp\)](#)

対人援助マガジン

[マガジン 54号 | 対人援助学会 ヒューマンサービスを科学する \(humanservices.jp\)](#)

福島県の方々（宮城の方々の公式ウェブサイトは見つかりませんでした）

[コミュニティ・カフェ EMANON | 福島県白河市高校生びいきの古民家カフェ](#)

[NPO 法人 しらかわ市民活動支援会 \(shirakawa-shienkai.or.jp\)](#)

[03_anzai.pdf \(hns.gr.jp\)](#)

[ホーム - 原子力災害考証館 Furusato on Strikingly \(mystrikingly.com\)](#)

東日本大震災とその復興に触れて ～境界とつながり～

実践人間科学領域 M1 太田光美

私はこの4泊5日の実習でこれまで経験したことのなかった出会いや体験がありました。まずは、出会えた方々、学びの機会を与えてくださった方々にお礼申し上げます。実習では東日本大震災による地震や津波、特に福島原子力発電所の事故によるその地域の方の生活に大きな変化を強いた現実に触れる場面が多くありました。その中で境界とつながりについて考えさせられる出会いがありました。

【民話との出会い】

9月1日の実習第1日目にやまもと民話の会の皆様と出会いました。まず、寺島重子さんがちゃんちゃんこを着て「下田沼の大蛇」「宝下駄」の民話を土地の言葉で聴かせていただきました。また、ひとりの方は震災直後何もなくなり混乱した状態だったが「何かをすることで心が落ち着いた」と話されました。民話を集める活動では話を聴くために尋ねても話してもらえず、何度も足を運ばれたこともあったそうです。また、話を聴くときには自分の体験と重ね合わせて聴いていたため、聴いた後は寝込むほど疲れ果てたそうです。やまもと民話の会の皆様は「語り継ごう」を合言葉に震災の体験を集められ3冊の証言集「巨大津波」を完成されたそうです。一方でやまもと民話の会の中心となっていた方が亡くなり、民話を語り継ぐことの難しさに直面しているとのことでした。実際にお話を聴かせていただいた体験により私自身に震災の時の情景を印象深くもたらされました。

9月2日の実習2日目にはみやぎ民話の会の皆様と出会いました。お一人の方からは「放射性物質による被害に「力が及ばない」と思いながらも、原発事故によって変化した生活について話を聴き、語り継ぎたいと思った」というお話を伺いました。また、震災前は飯館村で住んでおられた方からは飯館村は美しい村100選に選ばれたことのある美しい村だったが、原発事故により全村避難となったため他の土地に避難し、現在も飯館村には十分な医療環境がない状況のため高齢のご夫婦では生活できないと考えられ飯館村には帰られていないと話されました。そして、飯館村一番の語り手だった菅野キクさんの娘である菅野テツ子さんから飯館村の昔話や村での暮らし、原発事故後の避難生活や自宅に戻れない無念さを聴く中で、長正サツキさん、島津和子さん、山田裕子さんが残しておきたいと考えられ『語ってくんちええ 聞かせてくんちええ』を出版されたそうです。この本の表紙には美しい飯館村の風景が島津さんによって描かれ、本のタイトルは長正さんによって温かみのある文字で記されています。長正さんからは小学生だった頃に体験した村でのきつねの不思議なお話を聴かせていただきました。日常的一幕のお話だったが、お話しされている時にはその場に今いるような語り口で、ドキドキしたり、安心できたり、不思議な気持ちになったりし、飯館村を訪ねてみたい思いに至りました。昼食には飯館村で作られたもち米のおこわをいただきました。おこわはもちもちの食感で温かい気持ちまでもいただくことができました。

民話を通じて伝承の大切さと難しさを知りました。親から子への伝承、避難した先に通い続けることで可能となった伝承、そして民話の会の方の存在により多くの方への伝承などさまざまな伝承に出会えました。そして、語られるきっかけには「聴き手」の存在があり、「聴き手」の存在により語りは広がり、伝承できることも学びました。私はこの出会いで聴かせていただいた生き生きとした土地の魅力を秘めたお話を自分の身近な人に伝え、これからも知り続け、特に原発事故により土地を離れざるを得なかった人たちに思いを馳せ続けたいと考えました。

【黒川恵子さんと丸山隆さんの出会い】

9月1日実習第1日目にお二人と夕食を共にさせていただき、2日目には黒川恵子さんが震災後保育園を運営されていたトレーラーハウスに伺わせてもらいお話を聴きました。

黒川さんは現在おおぞら保育園の園長先生で、東日本大震災が起きた3月11日の2日前に震度4程度の地震が来たときに、次に地震が来た時の備えとして地震が来た時の避難場所やお迎えの方法について園児の親に連絡されて、避難の仕方も検討されていたことを伺いました。そして、津波が来たときは子どもをバギーにのせたり、大人が手を引いたりし川沿いを歩き小学校へ避難し、逃げるときは子どもたちが怖がらないようないつものトトロの歌を歌ったことを伺いました。そして、津波で保育園は廃園となったが、トレーラーハウスに出会い、トレーラーハウスで保育園を再開されたことを伺い、保育園はこうでなければいけないではなく、その時に必要とされた保育を提供された臨機応変な発想に驚きました。現在は他の場所で保育園は運営されており、トレーラーハウスは保育園ではなく、リラックスできる場所などの目的で利用されているとのことでした。12年経過する中で場の意味は変遷しながらあり続ける意味を考えることができました。

次に、丸山さんは現在多賀城市教育委員会にお勤めで、震災時は避難所で責任者として仕事をされたご経験について伺いました。丸山さんがいらっしゃった避難所では最初の1週間は役所の人など公的なサポートのみだったが、1週間後には避難している人達に協力してもらい当番制で物資の分配や掃除などを行うように運営が変化していったことを伺いました。また、公的な支援者も被災者であり、懸命に業務にあたっている状態に支援する人が倒れては支援できないという考えから、「寝ること食べることを徹底された」と伺いました。避難所には様々な援助物資の提案があったが、全員分はない場合もあり、全員分に足りない場合は断っていた避難所もあったそうです。丸山さんは「必要な人、不要な人がいる」と考え、足りない場合でも支援を受け、必要な人に配分したことを伺いました。また、夜中の2時から「これから100人の被災者を受け入れて欲しい」という連絡を受け、避難所のレイアウトの変更を実施し、それを機に避難所の構造を変化させたことや個別のニーズ（ペットがいる、高齢者、感染症罹患患者）への臨機応変な状況把握と対応が協働で行われていたことを伺いました。また、丸山さんから多賀城市の東日本大震災の被害状況について、今の私が理解できる資料をいただきました。その中には災害時に有効なグッズの一覧がありま

した。丸山さんは「冬と夏とは違う」とおっしゃられましたが、緊急時すぐに被災に備えてできることが記されており、今後の被災に備えできることを知ることができました。

お二人からお話を伺い、個人レベルで被災に備えることや非常時には今ここでの立場で決断することの重要性さを学ぶことができました。また、丸山さんはお話の中でこのプロジェクトが震災を改めて思い出すきっかけとなり、このような機会があることで話すことができるとお話いただきました。私たちが伺わせていただいていること、継続している意義を実感することができました。そして、東日本大震災で被災した地域に住む人と同じ日本とはいえ離れた場所にいる私たちをつなぐ装置にプログラムになっている意義を改めて理解できました。

【白河市での出会い】

白河市では『東日本・家族応援プロジェクト+プラス 2023 in 白河』が開催されました。ここではNPO 法人 白河市民活動支援会の共催、一般社団法人未来の準備室、特定非営利活動法人ビーンズふくしまの方々と一緒にプログラムを実施させていただく貴重な機会を得ることができました。NPO 法人白河市民活動支援会おひさまひろば副代表の小磯厚子さんらと共に「団士郎漫画トーク」「おもちゃで遊ぼう」「遊びとお話しの広場」「震災の記憶を聞き書きする」が行われました。

このプログラムでは小磯さんからおもちゃの遊び方を教えていただき、来場される方と共におもちゃで遊ぶこと、触れ合うことができました。遊ぶことは初めて会う、世代の異なる人と、楽しさや懐かしさといった様々な感情を共有できることに気づくことができました。その後に開催された「震災の記憶を聞き書きする」では浪江町で被災された方に震災にまつわる大切なものを持参いただき、高校生や大学生がそのものにまつわる体験を聞き書きする内容でした。今の高校生は震災当時 3～5 歳で震災の記憶が残る最後の世代のため、震災について語り継ぐ機会となりました。私もこの場に同席させていただき、一人の女性の方から原発事故により避難を突然強いられたこと、その中で「お金で買えない」家族写真を持ち出せたこと、家族が離散して避難したためなかなか連絡が取れず不安な日々を送られたこととお話いただきました。参加いただいた方から「震災の体験を話す機会はこれまでなかったが、話すことで思い出すことができた」と伺いました。東日本大震災や原発事故により生活の変化を強いられたそれぞれの物語について私は無関心だったことに気づくきっかけをいただきました。この機会をきっかけにこれからはそれぞれの方の物語に関心を持ち続けたいと考えました。

【大熊町への訪問】

実習 4 日目にヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館で事務局長 丹治杉江さんとの出会い、東日本大震災・原始力災害伝承館へ行く途中に大熊町を案内していただきました。車中より案内いただいたが、大熊町はそれまでの 3 日間訪れた町とは異なり、地震による

建物の損壊が生々しく残っていました。東日本大震災から 12 年経過した今でもこのような光景があることに驚きました。



大熊町は原発事故により全町避難した地域で、現在も「帰還困難区域」「通行証確認中」といった看板が多くの場所で見られました。帰還困難区域の土地には雑草が生い茂り、ガラスの割れた家や荒れ果てた庭木が放置されたままの住居が多くありました。また、柵の前には数人の警備の方がおり、その先には除染に伴い発生した廃棄物を貯蔵するための中間貯蔵施設がありました。一方で避難指示が解除された特定復興再生拠点区域には新しい住宅や学校、商店が建設され、人々の生活が始まっていました。しかし、特定復興再生拠点区域の町は帰還困難区域と隣り合わせであり、目に見えない放射線量の高い帰還困難区域との境界には柵がありました。



私はこの町の様子に触れた時、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館の館長、立命館大学国際平和ミュージアム終身名誉館長で原子力の専門家である安齋育郎先生が原発事故の被害について話された「科学性と経済性の土俵に乗せるな」「人は科学的に生きておらず、社会的・心理的な影響が大きい」という言葉を思い返しました。以前は田畑だった場所には大量のソーラーパネルが「大熊町ふるさと復興メガソーラー発電所」として 20 年間

土地が貸し出され、ここで発電された電力は売電され、復興に充てられ復興の一助となっていくことを知りました。このソーラーパネルがある土地は 20 年後持ち主に返却された際に農業を行うことができるのであろうか、科学的に農業ができると言われても、本当に安心して農業を営み、復興するのだろうかと考えさせられました。福島第一原子力発電所の廃炉に向けたプロジェクトの期間を考えると 20 年間はほんの短い期間とも考えられますが、世代交代は起こると思えます。この大熊町に生じている原発事故の被害による柵の内と外のこれからの繋がりについて興味を持ち続けたいと考えました。



【5 日間を振り返って】

今回の 5 日間の実習は私にとって初めてのプロジェクトへの参加でしたが、このプロジェクトが 12 年間継続していることにより、人と人との再開の場に出会うことができました。つながりは大きな震災や原発事故により 1 つの柵や道で否応なく分断される現実を知りました。そして、残念ながら 12 年間という時間の経過の中でお亡くなりになられた方がいらっしゃることも知り、つながり続ける難しさを体感しました。

つながり続けるためにはつながり続けられるための力や工夫、つまり私自身の存在は小さくても知り続けるという「装置」であることの必要性を考えました。そして、これからもそれぞれの小さな物語を「聴き手」として聴き続け、身近な人に震災や原発事故による影響を伝えられる「証人」であり続けたいと考えました。

最後になりますが、ここでは書ききれないほど様々な方に出会えたこと、そして様々な出会いの場を作って下さった皆様に感謝申し上げます。

出逢った皆様の生きざまに感銘を受けた5日間

実践人間科学領域 M2 東 知佐子

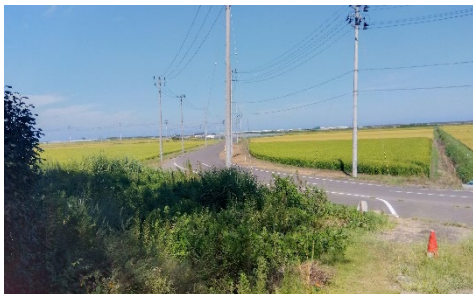
今年度のプロジェクトは前半2日間は宮城県を、後半3日間は福島県を訪れました。それぞれにおいて、本当に大きな学びと、想像を超える出会いをいただき、自分自身の人生にとっても大きな意味のある5日間となりました。お話ししてくださった皆様に心からの感謝を申し上げます。

【1日目（9月1日）】 常磐線に乗って宮城県山元町へ

1日目は宮城県の常磐線沿いの最南端の町で、600名以上が津波の犠牲になった山元町を訪れました。

山元町では、震災遺構として4億7千万をかけて残した中浜小学校を訪れました。10分後に10mの高さの大津波が来るという速報に、20分かかる別の避難所への移動をせず海拔10mの屋上にあがる決断をした校長先生の決断に身震いしました。津波の高さも奇跡的に収まり、一晩の避難ののちに、全員無事に救助されたという話にほっと胸を撫でおろします。

その後、やまもと民話の会の皆様のお話を聴かせていただき、「下田沼の大蛇」と「宝下駄」の2つの民話をお聴きしました。初めてお聴きする民話の調べが心地よく、魅了されました。



↑ 12年前は家々があったとのこと
行っていた



↑ 中浜小では2日前の前震の後に打合せを

【2日目（9月2日）】 みやぎ民話の会と多賀城市の丸山さん・黒川先生との出会い

午前中は福島県飯舘村の菅野テツ子さんのむかし語り『語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』の著者であるみやぎ民話の会の長正サツキさん、島津信子さん、山田裕子さんのお話を伺いました。

東日本大震災が起き、福島第一原発の事故が起き、長引く避難生活の中で、みやぎ民話の会の皆さんが、テツ子さんという語り部がいることを知り、避難所を捜し歩いたという話が印象深いものでした（当時は個人情報保護の観点から誰がどの避難所にいるのかはな

かなか知らせてもらえなかったそうです)。テツ子さんの人生にとって、避難生活はとてもつらく大変なものだったと思われますが、避難生活があったことで、テツ子さんの存在が再発見され、後世に残る書籍にもなったという不思議を感じました。



←みやぎ民話の会の皆様が、私達にも用意してくださったお昼ご飯。

それぞれの畑で取れたトマト・きゅうり・なすと共に、飯館村で除染が済み2年前からとれる様になったお米で炊いたおこわをいただいた。

どれもたまらなく美味。

午後は多賀城へ移動し、震災当時市役所の職員として、避難所運営の指揮に当たられた丸山さんのお話と、おおぞら保育園の園児さんたちを無事避難させ、その後トレーラーハウスで園を再開させた黒川先生のお話を伺いました。お2人とは前日の夜の懇親会でも、たくさんのお話を聴かせていただき、対面での対話を重ねることの意義と、10年以上に渡りこのプロジェクトが存在していることの意義を改めて感じました。

丸山さんからは、避難所生活はギスギスして人間関係が悪くなりがちなところを、とても温かい避難所を作り上げた秘訣を伺いました。丸山さんの避難所では、夜に大人数でストーブを囲みながら対話していたそうです。けれど最も驚いたのは、もう今ではその話をする機会もないというお話を伺ったこと。1年に1度こうして来てくれるから、話せることが嬉しいとおっしゃっていただいたことが印象的でした。また、私たち院生に、後世に残すべき素晴らしい資料も頂戴しました。いつどこで災害があるかわからず、災害時の避難所運営は、どこからも指示はなく、その時々創意工夫で行っていかなければならないことを鑑みると、丸山さんの資料は本当に広く日本中の人々に知ってほしいと思いました。



←車窓から多賀城の景色。

この辺りから先がすべて津波にのまれたそうです。

【3日目（9月3日）】白河での出会いを通してキャリア（生きざま）について考えた

白河でのプロジェクトの第1弾は団士郎漫画展とトーク。「この世界は『起こったこと』と『起こらなかったこと』からできている。にも関わらず、私たち人間は『起こったこと』ばかりに着目してしまう」という団先生のメッセージに心を驚掴みにされました。



この日はおひさまひろば副代表の小磯厚子さんと、一般社団法人未来の準備室理事長の青砥和希さんにお世話になり、浪江町から白河に避難し移住された方へ、白河の高校生とともに聞き書きをするという企画に参加しました。私が聞き書きをした方は、大堀相馬焼の13代目窯元の方。江戸時代から続く歴史を背負った方であるにも関わらず、避難先の東京のハローワークで公園管理や倉庫片付けの仕事しか紹介してもらえなかったとのこと。理由は資格がまったくなく、相馬焼以外の経験がないからとのこと。4グループで4名の方の話をお聴きし、もう1名、窯元でいらっしゃるにも関わらず、避難後に草刈りなどの仕事をされた方もいらっしゃいました。

浪江町の歴史を背負った窯元でありながら、ハローワークでは「資格なし」と判断されてしまう一方で、結局お二人とも、移住先の白河では窯元として復活を遂げられ、大堀相馬焼を広めていらっしゃいます。このことは並々ならぬ努力の末であり、あまり簡単な言葉では片づけたくないですが、うちお1人は「どこにぶつけていいかわからない憤りで12年経ちました。でもいつかは東電に仕返ししたい。今でもそう思っている。それは、俺が74歳まで生きる糧。団塊の世代だから闘争本能が強いのかもわからない。何ができるのかもわからないが合法的に痛めつけたい。」と仰られていたそうです。私以外の院生が参加しているグループでの発言で、私は議事録を拝読しましたが、この言葉は一生忘れません。

そして、この日の午後のプログラム「あそびとおひさまのひろば」では、しらかわ語りの会会長である鳴島あや子さんによる民話の語りがありました。あや子さんとは。たまたま昼食を取りにいったカフェでご一緒させていただき、お話を伺う貴重な機会がありました。ご自身のことは「語り部としては邪道」と仰られ、「これまでもそんなのは民話ではない、と言われ続けてきた」、と語られていましたが、その言葉の意味は、あやさんの語りが始まるとすぐに分かりました。あやさんの語りは、声色を変えたり、歌を織り交ぜたり、でとにかく面白いのです。現に、2歳児が2人聞き手にいたが、10分の長丁場を飽きることなく、むしろ語り手に接近する勢いで楽しく聞いていて驚きました。実は鳴島あやさんは幼稚園の先生であった方。いくら邪道と言われようが、子どもたちが面白く聞ける話でなければ意味がない、と全身全霊で証明されているようなお姿でした。



鳴島さんに近づいていく子どもの様子⇒

【4日目（9月4日）】ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館への訪問

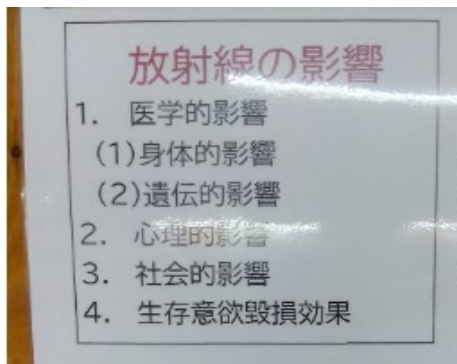
～科学者が科学の側面以外の訴求をする意味～

この日のレポートはヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館の館長の安齋育郎教授と、事務局長の丹治杉江さんとの出会いにつきます。

東京大学工学部原子力工学科の1期生でありながらその人生をかけて原発反対に動いていらっしゃる安齋先生。科学者である安齋先生が唱える放射線の影響は医学的影響（身体的影響／遺伝的影響）だけではなく、心理的影響・社会的影響・生存意欲毀損効果が大きく、そのことは2013年から続けている「福島プロジェクト」を通して気づかれたとのこと。事態は科学的に安全か否かだけの問題ではないのだと仰られました。

丹治さんは「せっかく漁業ができるようになった。それなのに処理水放出でまた魚が売れなくなる」と処理水差し止め裁判を起こされると言っておられました。

丹治さんご自身は被災後群馬県の前橋市に避難されておられましたが、昨年12月に亡くなられた宝鏡寺ご住職であり、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館を設立された早川篤推ご住職に託され、伝言館を運営するためにフクシマに戻ってこられたとのこと。その熱い志に心打たれた1日でした。



【5日目（9月5日）】歴史として残すこと ～Fスタディーツアー～

5日目は古滝屋さんのFスタディーツアーに参加しました。

地震被害に合われて家の下敷きになった方の搜索。どこからともなく聞こえてくる声に、日没で搜索を打ち切らざるをえなかった隊員が、明日必ず来るから、それまで頑張ってくださいと叫んで去ったのに、その夜に原発が危ないと避難指示が出て強制的にバスに乗せられたという話をお聴きしました。

古滝屋さん内には 16 代当主の里見喜生さんが設立された「原子力災害考証館 Furusato」があります。そして、その中に、まさしく、震災後の原発事故で我が子の捜索ができなくなり、5 年以上たって、歯とあごの骨を発見するに至った、木村紀夫さんによる展示物があります。次女の汐凧ちゃんは当時 7 歳、遺骨が発見されるまで 5 年 9 か月、今も生きていればちょうど 20 歳になっていたとのことで、木村さんは大学生が考証館を訪れて汐凧ちゃんのお話を聞いていくことを喜ばれるそうです。多くの人に語り継がれることで汐凧ちゃんの命が聴いた人々の中に息づいていく、その証人として自分も語り継いでいきたいと思います。

考証館内にある木村紀夫さんによる展示物。⇒
汐凧ちゃんのお服や写真などとともに、
当時の様子が分かります。



今回の実習を通じて、仮に、歴史上の大きな流れを「大きな物語」と呼んだとき、そこに現れない小さな物語が存在します。今回の学びにより、私は小さな物語を語り継ぐことの意味を知りました。大きな物語とともに小さな物語を歴史に残すために、証人の存在が大きいのだとも学び、自らが証人として語り継いで行くことの使命を受けたと感じました。

「東日本・家族応援プロジェクト+2023」に参加して

博士課程後期課程 河野暁子

2018年から継続的に参加してきたプロジェクトに、今年も参加した。宮城・福島的全行程に参加するのは初めてで、訪れる土地で多くの方々と出会い、貴重な時間を過ごさせていただいた。

やまもと民話の会の方々には、山元町の震災遺構中浜小学校を案内していただき、また山元町の民話を聴かせていただいた。みやぎ民話の会の方々からは、震災後に飯舘村から避難された方への聞き取りのお話を聴かせていただいた。民話活動がどれほど丁寧な心遣いを持って行われているのかを知ることができ、また人の話を聴くことの責任と覚悟を受け取った。

多賀城実行委員会の丸山さん、黒川さんとは、震災当時保育園だったトレーラーハウスで交流し、多賀城市内をご案内いただいた。復興が進んだ街並みからは震災当時の様子を想像することは難しいのだが、こうして現地の方々に教えていただくと、津波の到達点や避難経路など、具体的に体感することができた。

白河市のプログラムは、白河市立図書館で行なわれた。図書館内の開けたスペースで漫画展が行われており、多くの人が立ち止まって漫画を眺めている様子が見られた。午前中は団先生の「漫画トーク」で、家族をテーマにした漫画を用いての講話であった。家族というものを改めて考える時間となった。次のプログラム「あそびとおはなしのひろば」では、小さな子どもや高校生、大人も一緒にお手玉遊びをしたり、しらかわ語りの会の鳴島さんの語りに聴き入ったりした。世代を超えての交流が楽しく、笑顔いっぱいのプログラムであった。

午後は「震災の記憶を聞き書きする」で、浪江町から白河市へ避難されている方たちに大切なものをお持ちいただき、それにまつわるお話を高校生とともに聴かせていただいた。私が入ったグループは、原発事故当時高校生だった女性の方で、避難の時に持ち出した漫画本と避難所で書いていた日誌を見せてくださった。原発事故が起きたものの、すぐに帰れると思いつつも何も持たずに避難したため、弟が持ち出した漫画本であった。避難所生活が長く続くことになり、この漫画本を何度もきょうだいで回し読みしたとのことであった。原発事故によってどれほどの苦難を歩んでこられたのか、胸に重く響くお話であった。

翌日は檜葉町の宝鏡寺にある「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を訪ねた。館長であった早川和尚が昨年お亡くなりになり、現在は副館長であった立命館大学の安斎先生が館長を務めておられた。安斎先生のお話から、原発は単にエネルギー政策の話ではなく、平和に生きることへつながるのだと感じた。その後のフィールドワークで、南相馬市の「おれたちの伝承館」を訪ねた。写真家の中筋さんが館長を務め、双葉屋旅館やアーティストたちが中心となった施設である。どの展示作品も、原発事故への問いを力強く投げかけていた。

最終日は、古滝屋の「原子力災害考証館」の見学とスタディツアーであった。何度も参加

してきたツアーであるが、参加するたびに町が変化していく様子が見える。富岡駅近くには新たに慰霊塔が建てられていて、全員で手を合わせた。以前は帰還困難区域だった場所も、人が入れるようになっていた。大熊町の間蔵施設付近の道路では、自転車で走っている人の姿も見えたが、車内で測定した放射線量の数値が高い場所もあった。ひときわ目を引いたのは、太陽光発電のパネルである。かつては稲作が行なわれていた場所が、ソーラーパネルで覆い尽くされ、これもまた新たな産業廃棄物を生むのだという。

今年も限られた時間の中で、とても多くのことを学ばせていただいた。見たこと、聞いたことを、自分の中で消化していくには少し時間が必要だとも感じた。今後も宮城・福島へ通い、調べ、行動していきたいと思った。

最後に、プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。